

## 本来的に話すこと——不安の惹起をめぐる——

鈴木優花（慶應義塾大学）

本発表の目的は、現存在の開示性の契機である「語り（Rede）」を特に「話すこと／発言（Sprechen）」という様態において「本来的に」捉える可能性を提示することである。そのようなある一定の「本来的な開示性格」を「話すこと」から読み取るために、「話すこと」と良心の呼び声とを両者の差異を堅持しつつも類比的に考えてみたい。それに伴い、従来の研究では表だって俎上に載せられることのなかった、不安という根本情態性が惹き起される場合についても考察を加える。

なぜ以上の事柄が扱われるべきであるのかというと、一つには、周知の通り「率先的で解放的な顧慮的気遣い（die vorspringend- befreiende Fürsorge）」に関してハイデガー自身が言及していながらも、それが『存在と時間』において十分に展開されたとは言い難いからである。そのため本発表では、本来的な共現存在解釈として、空談に陥らない仕方で他者と「話し」、他者の声を「聞く（hören）」ことの可能性を探る。もちろん本発表も、いわば「本来的な語り」を「詩作的な語り（die dichtende Rede）」とみなすという、多くの先行研究においてなされてきた解釈から逸れることはない。もう一つには、不安という根本情態性を惹起させ、世界を世界として開示し、最も固有な存在可能性へと現存在を結果的に至らしめるはたらきが一たとえ世界内部的な存在者がその対象になっていようとも一、「恐れ（Furcht）」には根本的に含まれていると思われるからである。とりわけ、「驚愕（Erschrecken）」や「仰天（Entsetzen）」といった種別的な恐れを基に、不安が惹き起されるさまを考察する余地が残されているように思われる。

これらの論点に言及しつつ、本発表は以下の順序をふむ。はじめに、「良心の呼び声が現存在を通して言表される」可能性について論じる（第一節）。まず、「話すこと」が「言語／言葉（Sprache）」という「語り」の言表態である限り、他者に伝達されることによって存在者との第一次的な存在連関を失っているといった、空談の諸特徴を確認する。その上で、明らかにそれらとは対照的な特徴、すなわち「沈黙（Schweigen）」という仕方でもはや「話さない」という特徴をもった良心の呼び声が、「話す」という世界的な様態をとるという場合がありうるとしたらどのような場合であるのかを明らかにする。そしてそのような「良心の呼び声の言語化」を、詩的に「話すこと」として剔抉する。次に、そうした「話すこと」が、語り真似されることなく聞かれることで一良心の呼び声はひたすら聞かれるものであった一、聞き手におのれ固有の可能性を了解させるはたらきをもつことを論じる（第二節）。その際、呼ぶ者は聞き手たる当の現存在でありながら「それ（es）」がおのれに呼ぶという事態と種別的な恐れとの関係を論じる。以上の検討を通して「本来的に話すこと」、すなわち「不安を惹起させる契機としての「話すこと」」について一定の理解を得る。